

飲中八仙の歌（杜甫）

李白 一斗 詩 百篇

長安 市上 酒家に 眠る

天子 呼び 來れど 船に 上らず

自ら 稱す 臣は 是 酒中の 仙なりと

李白一斗詩百篇 長安市上酒家眠
天子呼來不上船 自稱臣是酒中仙

解説 杜甫が八仙に因んで戯れに同時代の名だたる酒客八人を選び、

『飲中八仙歌』を作った。此の詩は李白を詠ったもの。中唐初めの

八人の酒豪・賀知章、李璣、李適之、崔宗之、蘇晋、李白、張旭、
焦遂。

語釈 ※一斗||今なら三升ほど。※百篇||百の詩。※長安||中国の
旧都。現在の西安市付近。前漢以降の諸王朝の都とされたが、唐代
に最も繁栄した。洛陽に対して、西都・上都ともよばれた。

※天子||玄宗皇帝のこと。

通釈 李白は一斗の酒を飲む間に百篇の詩を作り、長安市上酒家に
眠る、天子からお呼びがかかってもすぐにいくことはなく、自らを
酒中の仙なりと称している李白は酒一斗を飲み、間に詩百篇を作り
だす。そして、いつも長安市中の酒家で眠りこんでしまう。天子か
ら召されたときも船に上ることができず、自ら「臣は酒びたりの仙
人でございます」と奏上したのである。